OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	映画「レナードの朝」をみて
Author(s)	柴田, 真理子
Citation	大阪公衆衛生. 1991, 59, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83637
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

映画「レナードの朝」をみて

吹田保健所　柴田真理子

物語は、友だちと元気に遊ぶ11歳のレナードが、突然右手が動きにくくなるところから始まる。ときが過ぎ、ある病院の風景。研究だけに没頭し、人は診たことがないセイヤー医師が、「脈ぐらいとったことがあるだろう」と、病院に採用され、「あなたの患者ですよ」と看護婦から初めての患者を紹介される。

無表情、無反応でじっと車椅子にうずくまっている老嬢。セイヤー医師は老嬢の目の前で、ボールペンを落とす。と、老嬢の手が、パッと反応してボールペンを見事にキャッチ。セイヤー医師の目が輝いた。

レナードもまた、老嬢と同じような姿になっていた。セイヤーは、年老いた母が、レナードにいろいろ語りかけている姿を見て、思いきった治療をほどこしていく。

原題は、「AWAKENINGS」と複数形である。無表情、無反応だった患者たちが、

奇跡のように元の元気な状態をとりもどす。失われていた何十年へ思いを馳せる人々の反応は様々であった。レナードは、見舞客の若い美女に恋をする。奇跡もつかの間、レナードは、以前になかったような激しいけいれん発作にみまわれる。「またこんな姿になるのに、なぜ私たちを目覚めさせたのだ」憤る患者もいた。

始めからセイヤーに好意を寄せ、何くれとなく援助の手をさしのべていた看護婦に、セイヤーの心も目覚める。この映画は全場面に人のやさしさが満ちていたと思う。思いきった大量の薬を投与する場面も、セイヤーが人として患者を治したいという熱意があればこそ、人体実験の感はなかった。

人のもつ可能性を信じて努力することの大切さ。その努力の結果のいかんにかかわらず、人間としての愛が貫かれていることが大事なのではないだろうか。

